

# 「ビュー」や「レーク」が付く ホテル名の日欧比較

—— 1960～70年代日本のホテル屋号 (3) ——

Comparison of Japanese and European Cases for Hotel Names included  
“View” or “Lake”. *Japanese Hotel Names of the 60s and 70s: Part 3*

河村英和  
Ewa KAWAMURA

## 要 旨

1960～70（昭和30～50）年代は、新築ホテルの開業ラッシュが起こり、日本各地で数々のホテルが誕生したが、その屋号の命名には、ある種の傾向があった。ホテルの所在地の地名に「観光」「国際」「温泉」「グランド」「ニュー」「ロイヤル」「ビュー」等といった特定の単語が組み合わされることが多く、その幾つかはヨーロッパのホテルの命名法を踏襲している。しかし、ヨーロッパでそのような屋号が多く派生した時期と、日本での流行期には一世紀近くのタイムラグがあるため、日欧で命名法が似たホテルでも、それらが開業する土地の傾向、建築技術・デザインや様式は全く異なっている。本稿（パート3）では、ホテルから良い「眺望」が見えることを示唆する「ビュー」という語が含まれる屋号について論じてゆく。さらに、ホテル立地の自然環境が反映される屋号のうち、湖畔・川沿いの良い眺めが望めるであろう「レークサイドホテル」「レークホテル」「リバーサイド」という屋号も本稿で取り上げる。次稿（パート4）では、海浜、山岳、公園、城郭の眺めを期待できる「海浜ホテル」「シーサイドホテル」「高原ホテル」「パークホテル」「キャッスルホテル」と命名される事例を扱う予定とする。

キーワード：ホテル、屋号、眺望、ビュー、ピクチャレスク、湖、レーク、河川、リバー

## 前々号・前号・本号までの目次：

本稿<sup>※</sup>を始めるにあたり、前々号「パート1」（第1章の「はじめに」ならびに第2章の2-1から2-4まで）と前号「パート2」（2章の2-5と2-6）の見出しに、本号「パート3」（第2章の2-7の2-7-1から2-7-3まで）の見出しを付け加えた「(本号までの) 目次」を、以下の通り示しておく。

### 1. はじめに

## 2. ホテル屋号の命名の変遷史：地名付きホテル名の日欧比較

### 2-1. 具象名で命名された宿屋

### 2-2. ホテル建築の概念の誕生と「王室（ロイヤル）」という屋号

### 2-3. 国名・町名の付いたホテル屋号

### 2-4. 「国際」を含むホテル名

### 2-5. 「グランド」を含むホテル名

### 2-6. 「ニュー」を含むホテル名

### 2-7. 良い眺望のある立地とホテル名

#### 2-7-1. 眺望の良さを示唆する「ビュー」を含むホテル名

#### 2-7-2. 湖の眺望を示唆する「レーク」を含むホテル名

#### 2-7-3. 河川の眺望を示唆する「リバー」を含むホテル名

### 2-7. 良い眺望のある立地とホテル名

今日、ホテル予約時に客室を選ばさい、どのような「眺め（ビュー View）」が見えるのかが明示され、眺望の良し悪しで値段が異なり、「ビュー」に対する宿泊施設の価値認識は当たり前とさ

---

※ 本稿は、本稿は、前々稿：「ロイヤル」や「国際」が付くホテル名の日欧比較—1960～70年代日本のホテル屋号（1）『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』（第34号、2022年）と、前稿：「グランド」や「ニュー」が付くホテル名の日欧比較—1960～70年代日本のホテル屋号（2）『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』（第35号、2023年）の続きである。

れている。しかし歴史的にみれば、良い「ビュー」を望めそうな場所に価値が置かれるようになるのは、修道院・王宮・貴族の別荘の立地選定と比べれば、ホテルはかなり遅かった。18世紀までのヨーロッパの宿屋で好まれた立地は、馬車の街道沿いや、郵便馬車の発着地点である広場やその付近である。つまり交通の便が優先されていた。眺望の良い立地でホテルを営業するという発想は、ロマン主義的な風景に対する美意識の「ピクチャレスク *picturesque*」が浸透し始めた18世後半以降である。旅の主たる目的地に、自然景勝が選ばれるようになるのもそれに足並みを合わせていた。17～18世紀に興隆した長期教養旅行であるグランドツアー *Grand Tour* では、古典主義的な教養と審美眼を高めるため、古代遺跡や美術品が豊富な都市を訪れることが必須であった。しかし18世紀半ばともなると、まずは「ピクチャレスク」よりも、スリリングさ恐ろしさも含む「崇高 *sublime*」なる自然景勝への関心から、旅の目的地として、滝や渓谷、アルプスのような畏怖すべき自然景観のある場所が、好まれるようになってきた。たとえばイタリア周遊中に、自然を見るという目的から選ばれたのは、轟々たるティヴォリ *Tivoli* やテルニ *Terni* の滝や、噴煙上がるヴェスヴィオ *Vesuvio* 火山である。ローマ平原 *Campagna Romana* にある自然や、ネミ *Nemi* 湖やアルバーノ *Albano* 湖といった幾つかの湖への関心は、プッサン *Poussin* やデュゲ *Duguet* が描く古典的な理想風景画と連動する教養的関心であり、本物の自然を見ようとする衝動とはまた異なっている。滝で有名なティヴォリも、古代遺跡のシビッラの神殿の価値も含めてこそであった。ティヴォリではたまたま、神殿と滝の真横に立地して、その両方を堪能できるホテルがあり、画家のあいだで人気があったが<sup>1</sup>、風光明媚な景色で名高いナポリ *Napoli* において、18世紀グランドツアー全盛期の宿の立地はどうであったのか。

ヴェスヴィオ火山を背にするナポリ湾の美しい眺望を、死ぬ前に一度は見ておくべきとする言い回し「ナポリを見て死ぬ *Vedi Napoli, e poi muori*」は、古から諺の如く広く知られているが、最初に出てきたとされる事例はじつは特定されていない。私が確認した範囲で、最も古かったのは、ゴルドーニ *Goldoni* の劇作品『コーヒー・ハウス *La bottega del caffè*』（1750年）にある記述である。ナポリ人の登場人物マルツィオが、トリノ出身者に対してトリノを「汚い町」と言いのけ、あえて無礼講を働くのは、自分の出身が眺望があまりに美しいナポリであるがゆえという以下のくだりである。

ドン・マルツィオ：「お里はどちらで？ *Di che paese siete?*」

レアンドロ伯爵：「トリノです *Di Torino*」

ドン・マルツィオ：「そりゃまた汚い町ですねえ *Brutta Città*」

レアンドロ伯爵：「それどころか、イタリアでも美しい町のほうかと思いますが *Anzi passa*

---

1 このシビッラの神殿とティヴォリの滝に接している「シビッラ旅館」については：河村英和「ローマとアニエネ川・サビーニ山方面の芸術家宿」、佐藤直樹編『西洋近代の都市と芸術 1：ローマ-外国人芸術家たちの都』竹林舎、2013、pp. 448-450.

per una delle belle d'Italia」

ドン・マルツィオ：「いやはや私はナポリ人なもんで、“ナポリを見て死ね”って言いますでしょ

Io son Napolitano. Vedi Napoli, e poi muori」<sup>2</sup>

しかしながら、この戯曲が書かれた1750年代のナポリでは、眺めが美しい海沿いの通りにホテルが並ぶことがまだ当たり前ではなかった。海が望めるサンタ・ルチア Santa Lucia 通りやリヴィエラ・ディ・キアア Riviera di Chiaia 通り沿いに、高級ホテルや外国人向けの下宿が続々と開業するのは、18世紀末から19世紀初頭にかけてである。ドイツの偉大な詩人ゲーテ Goethe が1787年にナポリを訪れたさい、自身の滞在記（1787年3月2日）にもこの「ナポリを見て死ね」という言い回しを引用し、ナポリ湾の眺望を絶賛しているが<sup>3</sup>、当時ゲーテが宿泊したのは、馬車の発着場に近しい町の中心である「城の前の広場 Largo del Castello」（現・市役所広場）の宿である<sup>4</sup>。ここは港にも近いため、海が遠目に見えても雑踏が激しい場所で、もっと間近に湾の眺望がある閑静なキアタモーネ Chiatamone 通りには、当時ナポリで一番の高級ホテル「クロチェレ Crocelle」もすでに1760年代に開業していたが、ゲーテはこの海に面した宿には宿泊しなかった<sup>5</sup>。何度もヴェスヴィオ火山を訪問したゲーテであるが、予算的都合でなければ、ホテルの窓から海とヴェスヴィオ山を存分に望める立地のこのホテルを選ぶほど、まだ「ホテルで」提供される「自然・景勝の眺望・ビュー」への価値認識が一般化するにはまだ早すぎたのかもしれない。

19世紀創業のヨーロッパのホテルでよくある屋号の一つに、「良い眺め（ベルヴェュ Bellevue）」を意味する仏語を使用した「ホテル・ベルヴェュ Hotel Bellevue」という名があるが、ナポリのガイドブックで同系統の屋号のホテル「Hotel de Bellevue」の紹介が見られるのは1845年になってからで、じっさい、このホテルはナポリ湾を見渡せる眺めの良い、リヴィエラ・ディ・キアア通りに位置していた<sup>6</sup>。

---

2 Goldoni, Carlo, *Collezione completa delle commedie*, Tomo I., Tipografia di Francese Bertini, Lucca, 1809, p. 117.

3 「ずいぶんとたびたび書き立てられ、褒めそやされたこの町の風光や名所については、改めて記すことはなからう。“Vedi Napoli e poi muori!”と土地の人は行っている。『ナポリを見て死ね!』ゲーテ（相良守峯訳）『イタリア紀行（中）』岩波文庫、1942年（初版）、p. 19.

4 ゲーテが泊まった「モリコーニ旅館 Locanda Moriconi」は、1794年には詩人ヴィンチェンツォ・モンティ Vincenzo Monti の書簡にも言及されており、当時のナポリの代表的な宿であったことがうかがわれる。Kawamura, Ewa, *Storia degli alberghi napoletani. Dal Grand Tour alla Belle Époque nell'ospitalità della Napoli «gentile»*, CLEAN Edizioni, Napoli, 2017, pp. 25-27.

5 このホテル「クロチェレ」には、ドイツ語圏の著名人では、ヘルダー Johann Gottfried Herder (1789年)、フンボルト Alexander von Humboldt (1805年)、グリルバルツァー Franz Grillparzer (1819年) が泊まっているが、1820年代以降は、他の新設高級ホテルに顧客を奪われるようになる。1870年代には前面が埋め立てられて、新たな海に面する通り（via Partenope）が建設されたため、ナポリ湾を目前にした眺望は完全に失われ、1877年には廃業、現在は一般の住家となっている。Kawamura, *op.cit.*, 2017, pp. 28-33; pp. 64-66.

### 2-7-1. 眺望の良さを示唆する「ビュー」を含むホテル名

ヨーロッパで最初期に確認できる「ベルヴュ」と付いたホテルの例は18世紀末で、やはり自然の眺望を愛でるようになる美意識が浸透する時代とともに派生している。1797年までに、オランダのデン・ハーグ Den Haag にできた「ホテル・ベルヴュ Hotel Belle-Vue」は<sup>7</sup>、1816年の町案内書によれば、「ベルヴュという名を持つ趣味の良いホテルで、庭があり、高貴な人物とその使用人が数人宿まることができる。森の遊歩道に非常に近く、(…) *un Hôtel de grand gout et du nom de Bellevue, qui a ses jardin, et peut loger plusieurs personnes de distinction, avec leurs domestiques. On y est très à portée des promenades du Bois, ...*」と記されており<sup>8</sup>、ホテルの目の前に広がる、自然（森）の眺めが良いことからの命名であることが察せられる。さらに同ホテルは、1841年の旅行案内書で、次のように「ピクチャレスク」という単語を用いて、その眺めの良さが描写されている。

「まるで絵に描いたかのような景色が、ホテルのどの窓からも見える。その美しい公園には、自然と贅沢な森の木々が続いており、日陰の下の広々とした場所で、鹿の群れが餌を<sup>は</sup>飲み憩っている。水路、森、林のなかに爽やかな散歩道（ほぼ2マイルの距離）があり、この上なく心地良い場所となっている。The views from the whole range of the windows of the Hotel are extremely picturesque, the beautiful Park studded with fine spreading forest trees in all their natural luxuriance, and throwing a shade over a large space upon which groupes of Deer are either feeding or reposing, sheets of water, and the Wood or Bosch, with its refreshing walks (of nearly two miles in extent) renders this as agreeable a spot as can be desired」<sup>9</sup>

隣国の首都ブリュッセル Bruxelles では1814年に、王宮に隣接した重要な場所に「ホテル・ベルヴュ Hôtel Belle-Vue」が開業しており、ここでもその屋号の由来は、建物の前に公園が広がった良い眺望のある立地からである<sup>10</sup>。

切り立った崖や高山の景観は、牧歌的で穏やかな「ピクチャレスク」の美というよりも、畏れ多い「崇高」さが勝っている。スイスでも初期にできた「良い眺め<sup>ベルヴュ</sup>」という名のホテルは、直に

6 Pistolesi, Erasmo, *Guida metodica di Napoli e i suoi contorni...*, Giuseppe Vara, Napoli, 1845, p. 695.

7 Schwencke, Johan, *Oud Den Haag: over mensen en dingen die voorbijgingen*, Kruseman's Uitgeversmaatschappij, Den Haag, 1974, p. 60.

8 Bruining, Gerbrand, *Déscription de la Haye, et de ses environs*, J. Immerzeer, Rotterdam, 1816, p. 32（このページは印刷ミスで「22」と番号が振られているが、32ページ目が正しい）

9 *The European Indicator, or Road-book for Travellers on the Continent*, Felix le Monnier, London; Paris; Brussels; Florence, 1841, p. 129.

10 現在その建物は、博物館として活用されている。https://www.belvue.be/en/mission/history（2022年4月5日閲覧）；L'hôtel Bellevue 1776-1905 : Précurseur de l'hôtellerie de luxe à Bruxelles, Archives de la Ville de Bruxelles, Bruxelles, 2008.



図1 19世紀末の写真にみる長崎の居留地にあった  
「Belle Vue Hotel ベルビューホテル」

アルプスを拝むものではなく、湖畔越しに遠方に高山をみるロマン主義的な「ピクチャレスク」な風景があるホテルであった。1839年の英国人向けのスイス旅行案内書には、トゥーン Thun 近郊のヒルターフィンゲン Hilterfingen にある「ホテル・ベルヴュ Hôtel Bellevue」（1833年築）は、「新しい一流ホテルで、アーレ Aare 川の景色を望む庭園に位置する *a new and first-rate hotel, well situated in a garden commanding a view of the Aar*」と紹介されている<sup>11</sup>。

1840年のスイスのホテル紹介本に載っている「ベルヴュ」という屋号のあるホテルは3軒のみで、このヒルターフィンゲンのホテルのほか<sup>12</sup>、ゲーテの詩「水上の精霊の歌 *Gesang der Geister über den Wassern*」(1779年)の中でも謳われた有名な滝があるラウターブルンネン Lauterbrunnen の「Grand Hotel du Bellevue」と<sup>13</sup>、温泉のあるロイク Leuk（ロイカーバート Leukerbad）の「Hotel de Bellevue」である<sup>14</sup>。1880年代から20世紀初頭にかけてのベルエポック期には、スイス各地、ヨーロッパ各地の自然景観の眺望を望めるあらゆるところに「ベルヴュ」という名のホテルができ、たいていの場合、いずれも高級ホテルとして誕生している<sup>15</sup>。

日本では戦前に、ヨーロッパ式の命名法に準じた「Belle Vue」と称する「ベルビューホテル」

11 *The Hand-Book for Travellers in Switzerland...*, John Murray, London, 1839, pp. 96-97.

12 Leuthy, Johann Jacob, *Der Begleiter auf der Reise durch die Schweiz*, J.J. Leuthy, Zürich, 1840, p. 153.

13 ここでは「Capricorne」という宿屋が「Grand Hotel du Bellevue」と改名された。Leuthy, *op. cit.*, pp. 132-133.

14 Leuthy, *op. cit.*, p. 84. 後年このホテルは「Hotel des Alpes et Belle Vue」と改名された。



が、長崎の外国人居留地にあった(図1)。このホテルは、1863年に英国領事館の警察官マシュー・グリーン Matthew Green によって開業された。当時は町で最も高級な外国人向けのホテルで、高台から長崎の景色が良く見える立地だった<sup>16</sup>。1893年には小泉八雲ことラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn も泊まっている<sup>17</sup>。

戦後、高度経済成長期の1960-70年代、日本各地に数多くのホテルが建設されても、「ベルヴュ」・「ベルビュー」という屋号は全く普及しなかった。例外的に1968年、富士山の絶景を望めることから、静岡県御殿場市神山丸岳落合に「ベルビューフジホテル」(現在は廃屋)できたが<sup>18</sup>、日本では「ベルビュー」よりも「ビューホテル」という名がよく好まれた。

戦後の日本の場合、ベルエポック期のヨーロッパの高級ホテルで慣例となっていた仏語呼びの伝統は継承されなかったため、どちらも同じ「眺め・景色」を意味する単語でも、仏語の「Vue (ヴュ)」ではなく英語の「view (ビュー)」を取って「ビューホテル」としたのだろう。とはいえ、アメリカでも「View」という語だけでホテルの屋号にするのではなく、「River View Hotel (川の景色ホテル)」や「Mountain (または Mount) View Hotel (山の景色ホテル)」という風に、まずどのジャンルの自然景勝かを示してから「View」を付けてホテル屋号とするのが一般的であるが、それでもあまり多くの事例はない。日本では明治時代、そのようにして名付けた例として、外国人居留地のある横浜で1869年に開業した「ベイ・ヴュー Bay View (湾の景色)」というホテルがあった<sup>19</sup>。

1936年に山梨県の河口湖畔に開業した「富士ビューホテル」(図2)も、「富士山」の景勝を臨めることからの命名である<sup>20</sup>。つまり戦後の日本でよく流行った「所在地名(=河口湖)+ビューホテル」という命名パターンではなく、戦前の日本は欧米と同様の発想で、「ホテルから見える景勝(=富士山)+ビューホテル」と名付けていたのだろう。じっさい「富士ビューホテル」は、県営で創設された外国人客を迎えるための高級ホテルだった<sup>21</sup>。「近代日本風」と称された建築様式で、帝冠様式に似たシンメトリカルな木造の和風建築であったが<sup>22</sup>、地元の人々の反対運動も

15 1870年代については、1874年の英トーマス・クック社の旅行代理店のクーポンが利用できるホテルに限ってみれば、「ベルヴュ Belle Vue」という名のホテルは、ベルン Bern、シエール Sierre、チューリヒ Zürich、ケルン Köln、ミュンヘン München にあった。Cook's Tourist's Handbook to Switzerland, Via Paris, Thos. Cook & Son, London, 1874, pp. 210-213.

16 現在、ホテル「ANA クラウンプラザホテル長崎グラバービル(旧・長崎東急ホテル)」がある場所に相当する。

17 Hearn, Lafcadio, *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn edited with and Introduction by Elizabeth Bisland*, Constable & C.; Houghton Mifflin, London; Boston, 1911, pp. 141-146.

18 ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑 1972年版』オータパブリケーションズ、1971年、p. 233.

19 澤護『横浜外国人居留地ホテル史(敬愛大学学術叢書3)』白桃書房、2001年、p. 289.

20 1985年に、現建物に建て替えられた。「新入会ホテル紹介:富士ビューホテル」『Hotel review = ホテルレビュー』1986年5月号、p. 21.

21 『富士屋ホテル八十年史』富士屋ホテル株式会社、1958年、p. 184.

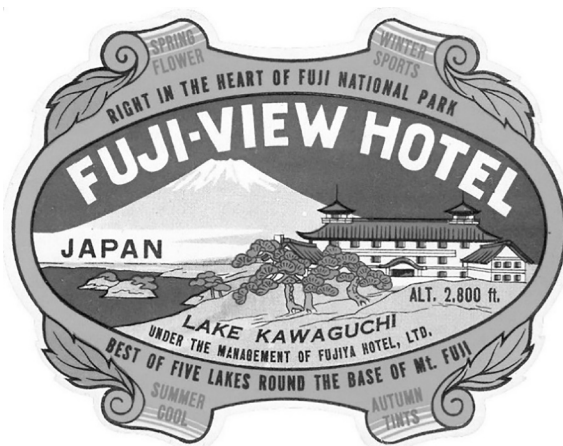


図2 河口湖畔から富士山がよく見えることを屋号と図像でアピールする「富士ビューホテル」の当時の靴ステッカー

空しく解体されてしまった<sup>23</sup>。

戦後の日本では「所在地名＋ビューホテル」という屋号が流行し、日本各地に「ビュー」の付くホテルが次々と誕生した。それは木造旅館から鉄筋コンクリート造に建て替えられ、ホテルの建物が高層化しはじめた時代に、最上階から見る眺望に娯楽性を見出していたことと関係があった。明らかに「ビューホテル」という名前を付ける以上、眺望にはこだわりがあるため、上層階から町のパノラマが見渡せる「スカイレストラン」や「スカイラウンジ」が設けられることが多い。欧米のベルエポック期のホテルでは、大食堂は天井の高い低層階に置かれるのが通例であり、屋上テラスでも食事ができる事例が派生するようになるのは1920年代ぐらいからで、ホテル最上階に展望レストランが設けられるようになってくるのは新築ホテルで、1940年代以降に少しずつ出始めた程度である<sup>24</sup>。日本では、「ビューホテル」という命名であるなしに関わらず、1960年以降に建ったホテルの多くが、塔屋か最上階に展望室（スカイルーム）や展望レストラン（スカイレストラン）の設置を行った<sup>25</sup>。「ビュー」が屋号に含まれるホテルの場合、たとえば、「郡山

22 設計は当時、箱根の「富士屋ホテル」を経営していた山口正造（1882-1944）で、施工は箱根宮ノ下の施工業者の河原徳次郎による。『富士屋ホテル花御殿・富士ビューホテル新築落成記念』富士屋ホテル株式会社、1936年

23 流石喜久巳『富士山麓に巻き起こった村おこし繁盛記』ぎょうせい、1985年、p. 215.

24 Kawamura, Ewa, *Lo sguardo dei turisti dall'alto. L'attrazione turistica delle vedute panoramiche italiane fra Ottocento e Novecento: campanili, torri, grattacieli e terrazze del belvedere*, in *La città globale. La condizione urbana come fenomeno pervasivo a cura di M. Pretelli, R. Tamborrino e Ines Tolic* (B: Città aperte / città chiuse. Istituzioni, politiche, competizione, diritti), AISU International, Torino, 2021, pp. 165-169.

25 河村英和「昭和30年代のホテル建築の特徴について」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第33号、2022年、pp. 40-42; 河村英和「新築完成予想図が掲載される昭和30～40年代のホテルパンフレットについて」『跡見学園女子大学 観光コミュニティ研究』第1号、2022年、pp. 61-64.



## 「ビュー」や「レーク」が付くホテル名の日欧比較



図3 屋号に「ビュー」を含む日本のホテルの絵葉書・パンフレット・荷札のロゴ・ホテル名が記載された部分のコレクション

ビューホテル」(1978年)は、11階に「素晴らしい眺望のスカイレストラン宝島」があり<sup>26</sup>、「長崎ビューホテル」(1981年)は、最上階に突出した「スカイレストラン」が設けられていた。東京・上野の国際劇場跡地に誕生した「浅草ビューホテル」(1985年)は、当初、回転展望レストランを設ける案もあったが<sup>27</sup>、回転レストランは実現しなかったものの、当時の上野エリアでは最も高い28階建てのビルとなり<sup>28</sup>、上層階には展望レストランが入った。

「ビューホテル」を含む屋号をもつホテルを、開業年順に並べると以下の通りとなる(図3)。

那須ビューホテル(1960年<sup>29</sup>)、有馬ビューホテル(1962年<sup>30</sup>)、能登ビューホテル寿苑(1963年<sup>31</sup>)、伊良湖ビューホテル(1968年<sup>32</sup>)、館山寺ビューホテル(1960年代<sup>33</sup>)、熱川ビューホテル(1970年<sup>34</sup>)、下田ビューホテル(1972年<sup>35</sup>)、鳴子ビューホテル(1972年<sup>36</sup>)、(堂ヶ島の)小松

26 「旅の楽しさを演出する日本ビューホテルチェーン—郡山ビューホテルオープン」『財界ふくしま』1978年5月号、p. 60.

27 「日本ビューホテル、国際劇場跡地に高層ホテル建設、60年秋開業—松竹が土地売却。』『日本経済新聞』朝刊、1982年8月25日、p. 9.

28 「浅草ビューホテル、高級路線を採る—シングルは一万五千元。』『日経産業新聞』1984年10月11日、p. 13.

29 加藤寛二「那須ビューホテルの設計」『建築界』1960年11月号、p. 26.

30 現在は「有馬きらり」として営業している。PR TIMES (株式会社阪急阪神ホテルズ)「有馬地域において、きらりと光る魅力ある施設にリブランドいたします『有馬ビューホテルうらら』から『有馬きらり』へ」2019年4月1日(月)グランドリニューアルオープン」2018年11月28日配信、<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000002249.000002504.html> (2023年4月4日閲覧)

31 北陸中日新聞七尾支局編『わくら物語』中日新聞北陸本社、1981年、p. 144.

32 斎藤武「タヒチアンパレスで好調なすべり出し—渥美半島 伊良湖ビューホテル」『月刊ホテル旅館』1968年11月号、pp. 15-20.

ビューホテル (1973年<sup>37</sup>)、玉川ビューホテル (1973年<sup>38</sup>)、賢島ビューホテル (1973年<sup>39</sup>)、白樺湖ビューホテル (1974年<sup>40</sup>)、諏訪湖ビューホテル (1974年<sup>41</sup>)、成田ビューホテル (1974年<sup>42</sup>)、沖繩ハーバービューホテル (1975年<sup>43</sup>)、(沖繩の)ロイヤルビューホテル (1975年<sup>44</sup>)、浜村ビューホテル (1976年<sup>45</sup>)、郡山ビューホテル (1978年)、長崎ビューホテル (1981年<sup>46</sup>)、黒部ビューホテル (1981年<sup>47</sup>)、秋田ビューホテル (1984年<sup>48</sup>)、高崎ビューホテル (1983年<sup>49</sup>)、岡山ビューホテル (1983年<sup>50</sup>)、阿寒ビューホテル (1984年<sup>51</sup>)、浅草ビューホテル (1985年)、定山溪ビュー

- 
- 33 1974年に放映された、東映の特撮テレビドラマ『イナズマンF』の第16話「謎の女 その名はデスパー秘密捜査官」に、「かんざんじビューホテル湖月(館山寺ビューホテル)」が登場しているが、その映像から1960年代の建物と思われる。現在は増改築のもと、「時わすれ開華亭」という屋号で営業している。2018年6月14日午後6:51発信のカノヒロ氏のツイート、[https://twitter.com/stronger\\_0607/status/1007198846068260865](https://twitter.com/stronger_0607/status/1007198846068260865) (2023年4月4日閲覧)
- 34 「熱川ビューホテル(伊豆・熱川温泉)」『月刊ホテル旅館』1971年3月号、pp. 26-28.
- 35 伊豆・下田ビューホテル オフィシャルブログ「下田ビューホテル 創業40周年!」2012年5月29日配信、<http://shimodaviewhotel.blog137.fc2.com/blog-entry-167.html> (2023年4月1日閲覧)
- 36 「鳴子ビューホテル(鳴子)」『月刊ホテル旅館』1972年10月号、pp. 32-34. 前身となる旅館の創業は江戸時代(1782年)に遡るが、2006年に閉業した。「鳴子ビューホテル、自己破産申請へ。」『日本経済新聞』東北版、2006年2月15日、p. 24. 現在は「大江戸温泉 幸雲閣」として営業している。
- 37 早川哲「小松ビューホテル(堂ヶ島)」『月刊ホテル旅館』1973年1月号、pp. 38-40.
- 38 品川建築事務所「玉川ビューホテル」『近代建築』1973年9月号、pp. 106-108.
- 39 「奥志摩で社員研修会やセミナーが増加—設備ととのえ、好評の賢島ビューホテル」『中部財界』1975年5月号、pp. 50-51. 2013年より現在は、「湯快リゾート」傘下の「リゾートホテル志摩彩朝楽」として営業している。
- 40 「白樺湖ビューホテル」の広告『読売新聞』朝刊、1974年6月4日、p. 8. 現在は伊東園ホテルズの傘下となっている。「成田ビューホテル」は、2022年7月より「アートホテル成田」として営業している。「マイステイズが運営承継 成田ビューホテル 名称改め来月から」『日本経済新聞』千葉版、2022年6月16日、p. 39.
- 41 「諏訪湖ビューホテル」は、諏訪湖の旅館3軒が共同で建てたホテルである。「中小旅館が共同でホテル建設—下諏訪町ですでに完成、横手駅前では51年春着工。」『日経産業新聞』1975年11月28日、p. 8; 荒井信夫「諏訪湖ビューホテル」『月刊ホテル旅館』1975年10月号、pp. 40-43.
- 42 「新入会ホテル紹介: 成田ビューホテル」『Hotel review = ホテルレビュー』1978年11月号、p. 19.
- 43 沖繩では、1975年に開催された沖繩国際海洋博覧会の開催にあわせて、幾つかのホテルが開業した。「沖繩ハーバービューホテル」は、那覇市中心部にあった米国人会員制「ハーバービュークラブ」の跡地にできたため、その名の由来は、元あった建物名から来ている。古田敏雄「沖繩ハーバービューホテル [設計・清水建設]」『新建築』1975年9月号、pp. 283-288.
- 44 「特集 沖繩国際海洋博覧会・沖繩の建築」『新建築』1975年9月号、pp. 230-233.
- 45 現在は「貝殻節の里 旅風庵」と改名されている。Trip.com「貝殻節の里 旅風庵」、<https://jp.trip.com/hotels/tottori-hotel-detail-1652919/kaigarabushi-no-sato-ryofuan/> (2023年4月4日閲覧)
- 46 幕末には「ナガサキクラブ」もあった外国人居留地跡地に建った。2004年に「ロワジュールホテル長崎」と改名されたが、2010年に閉業後解体され、現在はマンションが建っている。PR TIMES(大和ハウス工業株式会社)「旧居留地『ナガサキクラブ』・『ロワジュールホテル長崎(旧長崎ビューホテル)』跡地開発 分譲マンション『プレミスト大浦海岸通』概要決定」2011年6月23日配信、<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000105.000002296.html> (2023年4月4日閲覧)
- 47 やど日本(日本旅館協会)「大町温泉郷 黒部ビューホテル」、<https://www.ryokan.or.jp/inn/39590> (2023年4月4日閲覧)

## 「ビュー」や「レーク」が付くホテル名の日欧比較

ホテル（1985年<sup>52</sup>）、福島ビューホテル（1986年<sup>53</sup>）、沖縄オーシャンビューホテル（1987年<sup>54</sup>）、福岡ビューホテル（1988年<sup>55</sup>）、湯田中ビューホテル（1988年<sup>56</sup>）、函館ハーバービューホテル（1988年<sup>57</sup>）、（福岡・原鶴温泉の）ビューホテル平成（1989年<sup>58</sup>）である<sup>59</sup>。以上みてみると、「ビューホテル」という命名は、1960年代よりも1970年代がとくに顕著であるが、1980年代後半のバブル期でも、最上高層階に展望レストランを備えたホテルにおいて、ときに「ビューホテル」という名称が採用されていたことがわかる。

なおヨーロッパでは「ベルヴュ Bellevue」というホテルが派生すると、伊語で「良い眺め」を意味する「ベルヴェデーレ Belvedere（仏語化した Belvédère も）」や「ベッラヴィスタ Bellavista」

- 
- 48 「秋田ビューホテル、長野の企業に譲渡。」『日本経済新聞』東北版、2021年3月2日、p. 2。2021年より県内初の外資系「ANA クラウンプラザホテル秋田」として営業をはじめた。「IHG ホテルズ & リゾーツ、秋田ホテルの運営受託。」『日本経済新聞』東北版、2021年5月27日、p. 2。
  - 49 「高崎ビューホテル」は、2017年に閉業した。日本ビューホテル、1000室の大台乗せー4月に高崎で開業、岡山にFCで開設。」『日経産業新聞』1983年3月16日、p. 17; 「高崎ビューホテル閉館へ、年内、耐震投資回収難しく。」『日本経済新聞』北関東版、2017年1月14日、p. 41。
  - 50 「日本ビューホテル、1000室の大台乗せー4月に高崎で開業、岡山にFCで開設。」『日経産業新聞』1983年3月16日、p. 17。
  - 51 安場修「今月の新作ホテル旅館：阿寒ビューホテル（北海道・阿寒湖温泉）」『月刊ホテル旅館』1984年10月、pp. 24-25; pp. 41-46。
  - 52 PR TIMES（Karakami HOTELS&RESORTS 株式会社）「定山溪ビューホテル譲渡のお知らせ」2021年4月23日配信、<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000122.000049009.html>（2023年4月4日閲覧）
  - 53 「五月二十八日オープン of 福島ビューホテル」『財界ふくしま』1986年4月号、p. 92角に配置されたシースルーエレベータが印象的なバブル建築の高層ビルで、現在は、「The Celecton Fukushima」とリブランドされている。
  - 54 高橋栄一「ハーバービューホテルのアネックスとしてビジネス客含む利用を狙うー沖縄オーシャンビューホテル」『月刊ホテル旅館』1987年10月号、pp. 37-39; pp. 53-56。
  - 55 「九州初の『福岡ビューホテル』四月オープン」『財界九州』1988年3月号、p. 40。現在は、「アパホテル〈福岡渡辺通駅前〉EXCELLENT」となっている。
  - 56 現在は「一茶のこみち美湯の宿」と改名されている。一茶のこみち美湯の宿「会社概要」、<https://yudanakaview.co.jp/companyinfo/>（2023年4月4日閲覧）
  - 57 「海峡都市函館の新しい顔、本格的都市型ホテル「函館ハーバービューホテル」の青写真出来る」『はこだて財界 第2夏季増刊』1986年6月号、pp. 92-93。
  - 58 ビューホテル平成「当館について」、[http://viewhotelheisei.rakukansp.site/mp/page.php?PAGE\\_NO=325](http://viewhotelheisei.rakukansp.site/mp/page.php?PAGE_NO=325)（2023年4月4日閲覧）
  - 59 以上、「ビューホテル」と命名されたホテルのランナップのなかには、「日本ビューホテル株式会社」（1966年設立）の傘下にあるものと、そうではないものがある。「日本ビューホテル株式会社」は、「那須ビューホテル」（1960年）を開業した「那須観光株式会社」（1955年設立）を改名した会社で、那須での経験を生かして、リゾート路線の「伊良湖ビューホテル」（1968年）も開業させたが、都市型ビジネスホテル部門へも規模を拡大して、成田ビューホテル（1974年）、郡山ビューホテル（1978年）、岡山ビューホテル（1983年）、高崎ビューホテル（1983年）、秋田ビューホテル（1984年）、平ビューホテル（1993年）、両国ビューホテル（2015年）、札幌ビューホテル（2017年）、大阪ビューホテル（2018年）を開業させている。一方、かつて伊東園ホテルズ傘下にあった「彦根ビューホテル」は、元「彦根プリンスホテル」（1981年）を改名したものである。

と称するホテルも、イタリアはもちろん、戦前の欧米各地で幾つかできていったが、日本のホテル屋号にはほとんど普及しなかった。ようやくバブル期に、大分県上津江村のサーキット「オートポリス」を存分に眺められることを売りにした「ホテル・ベラ・ビスタ」(1992年)ができたが<sup>60</sup>、今は解体されて現存していない。

さらにベルエポック期のヨーロッパでは、仏語名で「Beau Site 美しい場所」や「Beau Sejour 美しい滞在」という屋号のホテルも、美しい自然景勝のリゾート地を中心に幾つかできたが、このタイプの命名は日本のホテルでは全く流行らなかった。

## 2-7-2. 湖の眺望を示唆する「レーク」を含むホテル名

17世紀のローマを拠点とするプッサンやロラン Lorrain が描く「理想風景画」が<sup>59</sup>、とりわけ英国人の間で18～19世紀に人気を博し、その原風景であるローマ平原までグランドツアーで足を延ばす必要なしに、英国にもその代替があることに気が付かせたのが「湖水地方 Lake District」だった。1770-80年代に主要な湖水地方の旅行記やガイドブックが立て続けに出版され<sup>61</sup>、有名なワーズワース Wordsworth の『湖水地方案内 *A Guide through the District of the Lakes*』(初版1810年、決定版1835年)も刊行され、「ピクチャレスク」な美を体現する「湖」の眺望は、とくにロマン主義時代から愛でられるようになったのである。

とりわけ「ピクチャレスク」な風景を好む英国人にとって、イタリアやスイスの湖畔も憧れの目的地だった<sup>62</sup>。スイスでは、仏語で「ホテル・デュ・ラック *Hôtel du Lac* (湖のホテル)」あるいは独語で「ゼーホーフ *Seehof* (湖館)」という屋号の宿は、1840年くらいから登場し始め、湖のピクチャレスクな風景を求めた英国人客に人気を博した。1840年に刊行されたスイスのホテルガイドブックでは、この屋号をもつのはジュネーヴの「*Hôtel du Lac (Seehof)*」の1件のみの紹介だったが<sup>63</sup>、同年チューリヒ *Zürich* 湖畔にも、「*Hôtel du Lac*」という屋号の宿が誕生している。1841年の旅行案内書には、そのホテルから見える「ピクチャレスク」な素晴らしい眺めについて、以下のような賞賛が記された。

「このホテルは、まるで絵に描いたように美しい場所にある。湖の右岸、リマト川の清流の河口

60 アーキテクトファイブ「ホテル・ベラ・ビスタ」『新建築』1992年1月号、p. 264.

61 ハチンスン William Hutchinson (1732-1814) 『湖水地方への旅 *An excursion to the Lakes*』(1774年)、ウェスト Thomas West (1720-1779) 『湖水地方案内 *A Guide to the Lakes*』(1778年)、ギルピン William Gilpin (1724-1804) 『1772年における湖水地方のピクチャレスク美の所見 *Observations, Relative Chiefly to Picturesque Beauty, Made in the Year 1772, on Several parts of England, Particularly the Mountains, and Lakes of Cumberland, and Westmoreland*』(全2巻、1786年)など。

62 河村英和『イタリア旅行—「美しい国」の旅人たち』中公新書、2011年、pp. 149-151; 河村英和『観光大国スイスの誕生—「辺境」から「崇高なる美の国」へ』平凡社新書、2013年、pp. 22-27; pp. 81-101.

63 Leuthy, *op. cit.*, p. 511.

に位置し、蒸気船乗り場のすぐ目の前にある。ホテルの見晴台やバルコニーからの眺めは筆舌に尽くしがたいほどに素晴らしい。*It is placed in one of the most picturesque and lovely situations on the borders of the Lake, on its right bank, at very entrance of the limpid Limmat, and immediately opposite the Station of the Steam Boats. The views from the Belvedere and the balconies of the hotel, are of the most splendid description*」<sup>64</sup>

このチューリヒの「Hôtel du Lac」は、同じくチューリヒ湖畔にある、今なお世界で最も格式高いホテルの一つである「ボー・オ・ラック」とは全く別のホテルである。この有名な「Hotel Baur au Lac (ボー氏の湖畔ホテル)」の開業は、1844年であり、1838年に馬車の発着地点に近い中心の広場(現在のParadeplatz)で、元パン職人のヨハネス・ボー Johannes Baur (1795-1865)が最初に開いた「Hotel Baur en Ville (ボー氏の町中ホテル)」が成功したため、新たに開業させた「au Lac (湖畔)」にある2号店である<sup>65</sup>。おそらくすでに「湖の du Lac」というホテルが先にあったため、ボーは自身のホテルの屋号をあえて「湖畔 au Lac」としたのだろう。

バルエポック期のヨーロッパでは、湖畔のホテルの名称に、「ボーリヴァージュ Beurivage (美しい岸边)」を使うこともしばしば行われた。なかでもローザンヌ Lausanne で1861年に開業したレマン Léman 湖畔・ウシー Ouchy 地区のホテル「ボーリヴァージュ Beurivage (現・Beau-Rivage Palace)」は名高く、当時も今もスイスを代表する高級ホテルの一つである<sup>66</sup>。

ときに「デュ・リヴァージュ du Rivage (岸边の)」という屋号も湖畔(ときに河川・海浜)のホテルに使われた。英語圏のホテル屋号「レイクサイド Lakeside」に相当し、ロマン主義時代から、英国の湖水地方のウィンダミア Windermere には「Lakeside Hotel」という小さなホテルが今も営業しているが<sup>67</sup>、同じ「湖畔」にあるホテルでも仏語名「du Lac」を屋号に使用するホテルの規模と高級感には及ばない。戦前の規模の大きめな「Lakeside Hotel」は、英国よりもアメリカ各地に開業している。日本では、仏語で湖畔をほのめかすホテル名は普及しなかったが、英語名「レークサイド」(初期は「レーキサイド」)や「レーク Lake」を使って命名したホテルは幾つかできた。

最も古くは日光・中禅寺湖畔の「日光レークサイドホテル」(1894年<sup>68</sup>; 1978年<sup>69</sup>)、戦後に開業した代表的な例では、「九重レークサイドホテル」(1965年<sup>70</sup>)や「田沢湖レークサイドホテル」

64 *The European Indicator*, 1841, pp. 238-239.

65 河村英和、前掲書、2013年、p. 94; <https://www.bauraulac.ch/de/bauraulac-geschichte.html> (2023年4月6日閲覧)

66 <https://www.brp.ch/hotel/histoire-et-situation/> (2023年4月6日閲覧)

67 *The Hotels of Europe (America, Asia, Australasia & Africa)*, London, 1878, p. 50; pp. 90-91. 17世紀の馬車宿に遡る。 <https://www.lakesidehotel.co.uk/by-the-lakeside/our-history/> (2023年4月6日閲覧)

68 ホテルレストラン誌編、前掲書、1971年、p. 95; ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑 1973年版』オータパブリケーションズ、1972年、p. 140.



(1969年<sup>71</sup>)がある。「レーク（またはレイク）ホテル」という屋号はもっと多く、河口湖の富士レークホテル（1951年<sup>72</sup>）、榛名レークホテル（1966年<sup>73</sup>）、館山寺レイクホテル（1966年<sup>74</sup>）、洞爺レークホテル（1973年<sup>75</sup>）、青蓮寺レークホテル（1975年<sup>76</sup>）、大山レークホテル（1997年<sup>77</sup>）がある。しかし1980-90年代の主要なホテルの事例がほとんど見つからず、このタイプの命名は1970年代までの傾向だったのであろう。

バルエポック期のヨーロッパのホテル名には、仏語で「des Bains 浴場の」という単語を付けるパターンもよくあった。湖畔にあるから「ホテル・デ・バン Hotel des Bains」と命名される例では、ローザンヌの対岸にあるレマン湖畔の町アンフィオン Amphion に、この屋号のホテル「Hotel des Bains」が19世紀にあったが<sup>78</sup>、たいていはフランス語圏の温泉町（エクス＝レ＝バン Aix les Bains やヴィシー Vichy にも「Hotel des Bains」はあった<sup>79</sup>）や、海浜リゾート地（ヴェネツィア Venezia のリド Lido 島のものが有名）において、よく見られるホテル屋号であるが、日本のホテルでこの命名パターンは全く流布しなかった。

### 2-7-3. 河川の眺望を示唆する「リバー」を含むホテル名

「ピクチャレスク」な牧歌的で穏やかな風光明媚さが好まれた18世紀末から19世紀のロマン主義時代は、前章で述べた「湖」と同様に、「川」の美しさも持てはやされた。「ピクチャレスク」の美を見出した理論家ウィリアム・ギルピンによる挿絵版画入りの旅行記『ワイ川沿いの観察 *Observations on the River Wye*<sup>80</sup>』（1782年）を皮切りに、「ワイ Wye 川下り」が人気を博するよ

69 「東武鉄道の関連会社東武赤麻開発 日光で最大規模の国際観光ホテル『日光レークサイドホテル』六月オープン」『東邦経済』1978年5月号、pp. 44-45; 「新作ホテル—日光レークサイドホテル」『月刊ホテル旅館』1978年11月号、pp. 64-67. 「日光レークサイドホテル」は2016年に閉業し、2019年にここに開業したのが、マリオット・グループの外資系ホテル「ザ・リッツ・カールトン日光」である。「米リッツ、日光に進出、東武鉄道、観光テコ入れ、高価格帯、富裕層のニーズ対応。」『日本経済新聞』北関東版、2016年9月29日、p. 41.

70 大成建設「九重レークサイドホテル」『大成クォーターリー』1965年12月号; 「九重レークサイド」『SD: Space Design』1966年3月号、p. 139; ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑 1972年版』オータパブリケーションズ、1971年、p. 366; 1972年、p. 433.

71 吉江憲吉設計事務所「田沢湖レークサイドホテル」『新建築』1969年7月号、pp. 212-216.

72 前身は1934年開業の「河口湖ホテル別館」で、1951年に「富士レークホテル」と改名して今に至っている。富士レークホテル「採用情報: 沿革」、<https://www.fujilake.co.jp/recruit/> (2023年4月6日閲覧)

73 朝日新聞社編『日本の宿—Where to lay your head in Japan』朝日新聞社、1977年、p. 155.

74 Ivi, p. 189.

75 Ivi, p. 131.

76 やど日本(日本旅館協会)「名張・青蓮寺 青蓮寺レークホテル」、<https://www.ryokan.or.jp/inn/53800> (2023年4月5日閲覧)

77 河村英和「日本各地で派生した『スイス村』計画の変遷と現状」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第32号、2021年、p. 90.

78 Cook, *op. cit.*, p. xxviii

79 Ibidem.

うになり、関連ガイドブックも次々と刊行され、ワイ川の観光化のほうが湖水地方のそれよりも早かった。版画家サミュエル・アイルランド Samuel Ireland (1744-1800) は、英国各地の川をテーマに、「ピクチャレスクな眺め *Picturesque Views*」と題する、挿絵入りガイドブックシリーズを 1790 年代に立て続けに刊行し<sup>81</sup>、スコットランドの小説家リーチ・リッチー Leitch Ritchie (1800-1865) に至っては、ワイ川だけでなく、むしろフランスの河川をテーマにした風景画家の大御所ターナー Turner の挿絵付きのシリーズを刊行してしまった<sup>82</sup>。

しかし湖畔にあるホテルではよくあった伝語の屋号「デュ・ラック」のように、川沿いにできた宿に対して「Hotel de la Rivière」という具合に、屋号に「リヴィエール Rivière (川)」という伝語を入れたヨーロッパのホテルは非常に少ない。一方、戦前までに開業したアメリカのホテルでは、「Riverside Hotel」という名が散見されるので、戦後は日本でもこの命名を踏襲した「リバーサイドホテル」という名のホテルが、以下に挙げる通り、幾つかできている。

大阪リバーサイドホテル (1960 年<sup>83</sup>)、佐渡リバーサイドホテル (1970 年<sup>84</sup>)、広島リバーサイドホテル (1971 年<sup>85</sup>)、石巻リバーサイドホテル (1974 年<sup>86</sup>) が主な事例である。前節でみた「レークサイドホテル」という命名は 1980 年代には影をすっかり潜めていたが、屋号「リバーサイドホテル」のほうは、1982 年に井上陽水が《リバーサイドホテル》という楽曲を発表している影響もあってか 1980 年代半ばも健闘しており、水戸リバーサイドホテル (1983 年<sup>87</sup>)、リバーサイドホテル熊本 (1984 年<sup>88</sup>)、五條市リバーサイドホテル (1986 年<sup>89</sup>) が開業している。

(つづく)

---

80 正式な題名は『*Observations on the River Wye, and several parts of South Wales, etc. relative chiefly to picturesque beauty; made in the summer of the year 1770*』である。

81 『テムズ川のピクチャレスクな眺め *Picturesque Views on the River Thames*』(全 2 巻、1792 年)、『メドウェイ川のピクチャレスクな眺め *Picturesque Views on the River Medway*』(1793 年)、『エイヴォン川のピクチャレスクな眺め *Picturesque Views on the Warwickshire Avon*』(1795 年)、『ワイ川のピクチャレスクな眺め *Picturesque Views on the River Wye*』(1797 年) である。

82 『ロワール川沿いを行く *Wanderings by the Loire*』(1833 年)、『セーヌ河沿いを行く *Wanderings by the Seine*』(1834 年)、『フランスの河川 *The Rivers of France*』(1837 年)、『リーベル・フルヴィエール (川の書) またはフランスの河畔風景 *Liber Fluviorum, or River Scenery of France*』(1853 年) などである。

83 ホテルレストラン誌編、前掲書、1972 年、p. 342。

84 「リバーサイドホテル〈佐渡〉」『月刊ホテル旅館』1970 年 12 月号、pp. 31-33。

85 ホテルレストラン誌編、前掲書、1972 年、p. 396。1998 年に「広島リバーサイドホテル」は解体され、跡地に「ホテル JAL シティ広島」が新築された。「ホテル JAL シティ広島、3 月 21 日に開業。」『日本経済新聞』広島版、1998 年 12 月 19 日、p. 23。

86 「新入会ホテル紹介：石巻リバーサイドホテル」『Hotel review = ホテルレビュー』1978 年 4 月号、p. 14。

87 「水戸市、ビジネスホテルいま“南北戦争”一駅南口に新設相次ぐ。」『日本経済新聞』北関東版、1983 年 9 月 14 日、p. 4。

88 「熊本市内にビジネスホテル建設ラッシュ、宿泊定員 630 人増へ。」『日本経済新聞』九州版、1984 年 9 月 12 日、p. 14。

### 【謝辞】

本研究は、2021年度跡見学園女子大学特別研究助成費を受けて実施された研究成果の一部である。ここに記して心より謝意を表します。

### 参考文献（和文）

- 朝日新聞社編『日本の宿—Where to lay your head in Japan』朝日新聞社、1977年
- 河村英和『イタリア旅行—「美しい国」の旅人たち』中公新書、2011年
- 河村英和『観光大国スイスの誕生—「辺境」から「崇高なる美の国」へ』平凡社新書、2013年
- 河村英和「ローマとアニエネ川・サビーニ山方面の芸術家宿」、佐藤直樹編『西洋近代の都市と芸術1:ローマ—外国人芸術家たちの都』竹林舎、2013、pp. 443-465
- 河村英和「日本各地で派生した『スイス村』計画の変遷と現状」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第32号、2021年、pp. 63-99
- 河村英和「昭和30年代のホテル建築の特徴について」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第33号、2022年、pp. 25-57
- 河村英和「日本の山岳・高原リゾート地における疑似スイス風シャレー建築と英国風・チロル風ハーフトインバー様式」『跡見学園女子大学 観光コミュニティ研究』第1号、2022年、pp. 23-41
- 河村英和「新築完成予想図が掲載される昭和30~40年代のホテルパンフレットについて」『跡見学園女子大学 観光コミュニティ研究』第1号、2022年、pp. 51-77
- 河村英和「『ロイヤル』や『国際』が付くホテル名の日欧比較—1960~70年代日本のホテル屋号(1)」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第34号、2022年、pp. 137-157
- 河村英和「『グランド』や『ニュー』が付くホテル名の日欧比較—1960~70年代日本のホテル屋号(2)」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第35号、2023年、pp. 91-117
- ゲーテ（相良守峯訳）『イタリア紀行（中）』岩波文庫、1942年（初版）
- 澤護『横浜外国人居留地ホテル史（敬愛大学学術叢書3）』白桃書房、2001年
- 流石喜久巳『富士山麓に巻き起こった村おこし繁盛記』ぎょうせい、1985年
- 『富士屋ホテル八十年史』富士屋ホテル株式会社、1958年
- 『富士屋ホテル花御殿・富士ビューホテル新築落成記念』富士屋ホテル株式会社、1936年
- 北陸中日新聞七尾支局編『わくら物語』中日新聞北陸本社、1981年
- ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑 1972年版』オータパブリケーションズ、1971年
- ホテルレストラン誌編『日本ホテル年鑑 1973年版』オータパブリケーションズ、1972年

---

89 やど日本（日本旅館協会）「五條市リバーサイドホテル」、<https://www.ryokan.or.jp/inn/56290>（2023年4月5日閲覧）

## 「ビュー」や「レーク」が付くホテル名の日欧比較

### (欧文)

- Bruining, Gerbrand, *Description de la Haye, et de ses environs*, J. Immerzeer, Rotterdam, 1816
- Cook's Tourist's Handbook to Switzerland, Via Paris*, Thos. Cook & Son, London, 1874
- Goldoni, Carlo, *Collezione completa delle commedie*, Tomo I., Tipografia di Franceseo Bertini, Lucca, 1809
- Hearn, Lafcadio, *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn edited with and Introduction by Elizabeth Bisland*, Constable & C.; Houghton Mifflin, London; Boston, 1911
- Kawamura, Ewa, *Lo sguardo dei turisti dall'alto. L'attrazione turistica delle vedute panoramiche italiane fra Ottocento e Novecento: campanili, torri, grattacieli e terrazze del belvedere*, in *La città globale. La condizione urbana come fenomeno pervasivo* a cura di M. Pretelli, R. Tamborrino e Ines Tolic (B: Città aperte / città chiuse. Istituzioni, politiche, competizione, diritti), AISU International, Torino, 2021, pp. 158-172
- Kawamura, Ewa, *Storia degli alberghi napoletani. Dal Grand Tour alla Belle Époque nell'ospitalità della Napoli «gentile»*, CLEAN Edizioni, Napoli, 2017
- Leuthy, Johann Jacob, *Der Begleiter auf der Reise durch die Schweiz*, J.J. Leuthy, Zürich, 1840
- Pistolesi, Erasmo, *Guida metodica di Napoli e i suoi contorni...*, Giuseppe Vara, Napoli, 1845
- L'hôtel Bellevue 1776-1905 : Précurseur de l'hôtellerie de luxe à Bruxelles*, Archives de la Ville de Bruxelles, Bruxelles, 2008
- Schwencke, Johan, *Oud Den Haag: over mensen en dingen die voorbijgingen*, Kruseman's Uitgeversmaatschappij, Den Haag, 1974
- The European Indicator, or Road-book for Travellers on the Continent*, Felix le Monnier, London; Paris; Brussels; Florence, 1841
- The Hand-Book for Travellers in Switzerland...*, John Murray, London, 1839
- The Hotels of Europe (America, Asia, Australasia & Africa)*, London, 1878

### (雑誌記事) (時系列順)

- 加藤寛二「那須ビューホテルの設計」『建築界』1960年11月号、p. 26
- 大成建設「九重レークサイドホテル」『大成クォーター』1965年12月号
- 「九重レークサイド」『SD: Space Design』1966年3月号、p. 139
- 斎藤武「タヒチアンパレスで好調なすべり出し - 渥美半島 伊良湖ビューホテル」『月刊ホテル旅館』1968年11月号、pp. 15-20
- 吉江憲吉設計事務所「田沢湖レークサイドホテル」『新建築』1969年7月号、pp. 212-216
- 「リバーサイドホテル〈佐渡〉」『月刊ホテル旅館』1970年12月号、pp. 31-33
- 「熱川ビューホテル〈伊豆・熱川温泉〉」『月刊ホテル旅館』1971年3月号、pp. 26-28

- 「鳴子ビューホテル〈鳴子〉」『月刊ホテル旅館』1972年10月号、pp. 32-34
- 早川哲「小松ビューホテル〈堂ヶ島〉」『月刊ホテル旅館』1973年1月号、pp. 38-40
- 品川建築事務所「玉川ビューホテル」『近代建築』1973年9月号、pp. 106-108
- 「奥志摩で社員研修会やセミナーが増加—設備ととのえ、好評の賢島ビューホテル」『中部財界』1975年5月号、pp. 50-51
- 「特集 沖縄国際海洋博覧会・沖縄の建築」『新建築』1975年9月号、pp. 230-233
- 古田敏雄「沖縄ハーバービューホテル〔設計・清水建設〕」『新建築』1975年9月号、pp. 283-288
- 荒井信夫「諏訪湖ビューホテル」『月刊ホテル旅館』1975年10月号、pp. 40-43
- 「新入会ホテル紹介：石巻リバーサイドホテル」『Hotel review = ホテルレビュー』1978年4月号、p. 14
- 「旅の楽しさを演出する日本ビューホテルチェーン—郡山ビューホテルオープン」『財界ふくしま』1978年5月号、p. 60
- 「東武鉄道の関連会社東武赤麻開発 日光で最大規模の国際観光ホテル『日光レークサイドホテル』六月オープン」『東邦経済』1978年5月号、pp. 44-45
- 「新作ホテル—日光レークサイドホテル」『月刊ホテル旅館』1978年11月号、pp. 64-67
- 「新入会ホテル紹介：成田ビューホテル」『Hotel review = ホテルレビュー』1978年11月号、p. 19
- 安場修「今月の新作ホテル旅館：阿寒ビューホテル（北海道・阿寒湖温泉）」『月刊ホテル旅館』1984年10月、pp. 24-25; pp. 41-46
- 「五月二十八日オープンの福島ビューホテル」『財界ふくしま』1986年4月号、p. 92
- 「海峡都市函館の新しい顔、本格的都市型ホテル「函館ハーバービューホテル」の青写真出来る」『はこだて財界 第2夏季増刊』1986年6月号、pp. 92-93
- 高橋栄一「ハーバービューホテルのアネックスとしてビジネス客含む利用を狙う—沖縄オーシャンビューホテル」『月刊ホテル旅館』1987年10月号、pp. 37-39; pp. 53-56
- 「九州初の『福岡ビューホテル』四月オープン」『財界九州』1988年3月号、p. 40
- アーキテクトファイブ「ホテル・ベラ・ビスタ」『新建築』1992年1月号、p. 264